

# サーラ・スヴェンさんに聞く

小泉首相の靖国神社参拜に批判が強まっています。戦後、ナチスの犯罪を追及してきたドイツでは、戦争による死者はどのように追悼されているのか、日本に滞任し日本史研究をしているサーラ・スヴェンさんに聞きました。

## どう記憶するか

ドイツでの戦争での死者の追悼というと、まずヨーロッパ各地で虐殺されたユダヤ人記念碑を思い出します。ユダヤ人虐殺はドイツで一番重い出来事で数も多いのですが、近年はユダヤ人と並んでナチス・ドイツが排撃の対象としたツプシーや同性愛者、障害者などすべての被害者の記念碑もつくられています。

ドイツでは軍人の追悼施設の多くは教会に付属し非政治化されています。国の追悼とは、おもに犠牲者をどう「記憶」するかだと考えられているからです。そこが軍人・軍属のみを靖国神社にまつる日本と最も違う点です。

「記憶論争」はドイツでももちろんいろいろあります。例えば、なぜホロコーストの犠牲者だけを追悼する記念碑



もあつたユダヤ人虐殺などの出来事を記念する銘板や記念碑を網羅しています。私の生まれたザウルハイム村にも一九八九年にナチ支配の犠牲となつたユダヤ人のための記念碑がつけられたと記されています。

Sven Saaler = 1968年、西独生まれ。金沢大学に留学後ボン大学・同大学院卒。ドイツ-日本研究所研究員。日本近現代史・政治史。著書に『大正時代における民主主義と軍国主義の間』。

## 宗教と政治は… 軍人追悼は…

# 「靖国」から見た日・独の落差



ベルリン郊外のザクセンハウゼン・ナチス強制収容所跡で係員の説明を聞く参観者 (1996年、夏目雅至撮影)

につくられるのです。

そのため、国がつくった追悼施設も同様で、おもに犠牲者のためにあるのが特徴です。ベルリンの「戦争と暴力支配の犠牲者のための中央追悼所」には軍人も「犠牲者」として入っています。また、ユダヤ人収容所の跡に国の追悼所ができています。「ドイツ抵抗運動追悼所」のある通りには、ヒトラー暗殺のために爆弾をしかけたシュウタウ

## 戦死軍人の追悼

靖国神社を考えると、まず、靖国神社という宗教施設に政治家が公式に参拝することの問題があります。

戦死した軍人の私的な追悼はドイツでも行われていますが、墓は教会の墓地に家族が私的につくっています。政治家が参拝することもあつて、

## 歴史認識の問題

ドイツでも、過去の問題に向き合うようになるには時間がかかり、いくつかの段階がありました。そこは日本に似ているところも多いでしょう。戦後すべの十年間は「失われた十年」で、賠償金を払

って忘れておこうという雰囲気がありました。しかしヨーロッパの真ん中にある国で、戦争責任を認めなければ孤立する危機感があり、それを促す外圧もありました。大きく変わったのは、一九六八年の学生運動がきっかけでした。しかし長い間、戦争責任はナチスにあり、普通のドイツ人は悪くないというのが一般的な認識でした。ドイツ人としての加害責任の議論が盛んになったのはこの十年ほどです。

私は、過去は「克服」できるものではないが、過去は「認識」する必要のあるものだと思っています。そこで追悼や記念碑の問題は、戦争の歴史をどう認識するかという課題として、改めて問われているのです。

聞き手・八木絹記者

# 学問 文化

を建てるのかを問うた、近年の「ホロコースト記念碑論争」。これは「記念碑論争」(一九九九年)という千三百ページの本にまとめられました。政治教育連邦センター編『ナチ支配による犠牲者記念碑一覽』は、戦争中どの町や村で

四十回以上ありました。

靖国神社にはA級戦犯が合